

はじめに

安政2年10月2日(1855年11月11日)に発生した安政江戸地震は、典型的な都市直下の地震、現在ならいわば首都圏直下地震であって、江戸を中心に大災害をもたらした。震害と火災により、1万人前後の死者が出たとされる。ただこの日は、比較のおだやかな天候で、風も弱かったため、関東大地震の時のような広域火災にまで発展しなかったのは、せめてもの幸이었다。地震の規模は、マグニチュード(M)7.0~7.1と推定されている。

江戸が大規模な震災に見舞われたのは、1703年元禄地震以来、ほぼ150年ぶりのことであつた。

この安政江戸地震が発生する前後は、日本列島の各地で、大きな災害をもたらすような地震が相次いだ時代であつた。

弘化4年3月24日(1847年5月8日)には、善光寺地震(M7.4)が発生、善光寺領や松代領^{まつしろ}を中心に、震害と火災で1万人規模の犠牲者が出た。また松代領内だけで、4万か所にも及ぶ山崩れや地すべりが発生したが、なかでも虚空蔵山^{こくぞう}の崩壊による大量の土砂が犀川^{さい}をせき止め、のちに決壊して善光寺平に大洪水をもたらしている。

嘉永6年2月2日(1853年3月11日)には、小田原付近を震源とする地震(M6.7)により、城下町小田原を中心に、全壊家屋1,000戸以上、死者24人を出した。

江戸地震の前年にあたる嘉永7年=安政元年(1854)には、まず6月15日(7月9日)に、伊賀上野付近を震源とするM7 $\frac{1}{4}$ の地震が発生、上野で2,000戸あまり、奈良で400戸あまりが倒壊し、1,500人を超える死者が出た。

同じ年の11月4日と5日(12月23日と24日)、安政東海地震(M8.4)と安政南海地震(M8.4)が、わずか32時間の間隔をおいて発生した。両者とも南海トラフ巨大地震であり、広域にわたる震害と津波災害を引き起こした。死者の数は、東海地震で2,000~3,000人、南海地震で数千人とされている。

江戸地震から3年後の安政5年2月26日(1858年4月9日)には、M7.0~7.1の飛越地震が発生した。跡津川断層^{あとつがわ}の活動による内陸直下地震で、家屋の倒壊により、富山で約70人、飛騨で200人あまりの死者が出た。また、立山連峰の大鷲山^{おおとんび}、小鷲山^{ことんび}が大崩壊を起こし、常願寺川^{じょうがんじ}の源流部にあたる湯川の谷をせき止め、のちに2回にわたり決壊して、

富山平野に大規模な洪水災害をもたらした。溺死者約 140 人といわれる。

火山活動をみても、嘉永 6 年（1853）に有珠山が大噴火して、大有珠溶岩ドームを生成、火砕流も発生した。安政 3 年（1856）には、北海道駒ヶ岳の大噴火で、火砕流により多数の死者が出ている。

このように、弘化から安政期を中心とする 10 年あまり、日本列島は地学的激動の時代にあったといえることができる。

折からこの時代は、江戸幕府の鎖国政策が破綻し、幕藩体制の揺らぎがますます大きくなっていく国政の混乱期でもあった。江戸地震の 2 年前（嘉永 6 年）には、ペリー提督率いる 4 隻の黒船が浦賀沖に現れ、幕府に国書を渡して通商を迫った。江戸湾にまで進入した黒船に、幕府は狼狽し、江戸市内は大混乱に陥ったという。江戸幕府にとっては、まさに内憂外患の時代だった

こうした国事の外患に、幕府首脳が奔走していた安政 2 年（1855）10 月、江戸地震が起きた。老中阿部正弘は、ペリーの突きつける開国、通商要求に対する幕府内部の強い反対意見を押しさえ、また、その急先鋒の水戸藩前藩主徳川斉昭なりあきとも折り合いをつけつつ、外患を乗り切ろうとしていた。そのさなか、新たに起きたこの内憂に対して、彼は同じく開国派の堀田正睦まさよしを震災担当大臣に推すことで処理しようとした。そして、翌安政 3 年（1856）いっぱいには、幕府の組織を挙げて、震災復旧に当たらせた。

開国、通商がまだ条約面だけのことであったこの時期は、幕府も、諸藩も従来通りの災害対応力を失ってはいなかったから、江戸町会所の救済もスムーズに展開された。金持ちたちによる施しも行われ、一時的に震災景気で民間が潤うかにみえた。

その様子は、当時多量に出回った地震鯨絵にみることができる。通常の錦絵の出版手続きを踏まない、これらの一種の違法出版が描き出す風刺と諧謔かいぎやくから、震災を受けた人びとの世相に対する不安と期待を織り交ぜた複雑な心情を読み取ることができる。そこには、当時の人びとの心の中の光と闇が描かれたり、震災の混沌から新しい秩序を展望する力も生み出されたりした。